

● 特集 ● 教科書の徹底活用

# 本文で何を 学ぶことができるか

杉本 薫

(江東区立東陽中学校)

## 1. 教科書の本文とは

教科書で普通「本文」と呼ばれる部分は実に多様で、会話やダイアログで展開するページもあれば、物語を記述するページもある。手紙やポスターのようにコミュニケーションの一つの形態に特化しているものもある。内容についても、特定の登場人物の学校や家庭での生活を追って日常使われる表現を紹介しているもの、日本や海外の文化的な面に触れているもの、文学作品や映画の要約、実在の人物の生き方をドキュメンタリー的に紹介するもの、意見文や論説文のように問題提起を意図するものもある。

しかし、英語の教科書なので当然制約もある。それらは英文や語彙の量であり、使用される表現のレベルなどである。基本文や重要な表現の配列、いわゆる文法事項は、現行の教科書ではすべてこれが構成上の中心的な要素になっている。いわば、縦軸である。そうすると横軸の方は、語彙や音声についての指導事項だろうか。

教科書本文の多様性とは、縦軸(x軸)と横軸(y軸)に対して、z軸のように立体性を持たせる要素といえないだろうか。ある表現が使われる場面背景、人物描写、そしてある表現の言語使用の必然性を受け持つ部分だからだ。

もう一つ忘れられない要素は、「内容の面白さ」だろう。教科書には多くの制限があるので、この英文量だけで、「わくわくしながらページをめくる読書の楽しみ」を教えることは難しい。しかしそのような読み方への橋渡しは可能である。例えば作者や小説など文学作品の紹介、話題や題材の提供という部分である。読書への接近を促すという意味では、さらに重要だし、教師の人生経験が大いにものをい

う分野である。

本文を有効に使うことは、言語を教科書という2次元の世界から立体的に引き出して、我々の生活する社会に近づけることといえそうだ。

僕は英語の授業でよく映画の話をする。実際に映画を見せることもあるが、「映画で英語を学ぶ」という話になると、こんな言い方をする。好きな映画を見つけて、何回も見て、気に入ったセリフを一つ覚えなさい。2時間の映画でセリフ一つ。非効率的に聞こえるが、非常に有効である。映画は2時間のドラマの中で、時代や社会の背景、登場人物の性格、生き方、過去、人間関係を説明しきっている。その理解に基づいてある場面で使われる「ひと言」は、よく理解できるはずだ。運良く同じように使える部面が巡ってくれば、これは絶対の自信を持って使える。めったにはないけれど。

この「ひと言」が基本文だとすると本文は映画本編になる。教科書3～4ページの本文は3億ドルの制作費に対抗できるだろうか。僕はできるかもしれないと思っている。ただし、黙って2時間座らせておけばいいわけではない。2次元から3次元にふくらませる教師の指導の工夫が必要になる。

## 2. 教科書を開く前に—「聞く」「話す」から

新教材を扱うために、授業で教科書を開くのは、授業の後半になることが多い。その前に欠かせない指導がオーラル・イントロダクションである。これは、「読む」教材を、「聞く・話す」領域で導入して、「読む」ことの準備をする学習である。一方的に教師が説明するばかりではなく、多くの場合オーラル・インターアクションとして生徒との英語でのやりとりを増やす手法が用いられる。

ここでの提示の仕方をモデルとして、後に生徒に教科書の内容を再現させることは、非常に有効な指導方法である。英語を使った発表活動としては、同じレッスンだけでなく、次のレッスンでも繰り返して指導できる場面だからだ。「読む」教材を、最終的に「聞く・話す」領域で発信させることができる。学習の立体化のイメージはここでも有効だ。

こういった考え方でとりくめば、教科書の本文の指導を通じて、例えば【表現の能力】の領域の「既習の英語を用いて簡単なプレゼンテーションができる」「事実を正確に英語で説明し、伝えることができる」というねらい（評価規準）に迫ることができるだろう。また、このような活動がある程度繰り返していくことによって、【表現の能力】に至る以前の段階として、【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】の領域を指導、評価することができる。その場合の評価規準は「既習の言語材料を用いて、英語を使うことができる」「ほかの生徒の英語をしっかり聞く態度が見られる」、さらには「間違いを恐れず、英語を使うことができる」といった項目になるだろう。

オーラル・イントロダクションでは、既習の表現で、既習の語彙を使って理解させることが基本だ。しかし、新教材には当然新しい語彙が含まれている。これらを効率よくドリル練習することも重要である。ここがフラッシュカードの出番になる。新出語彙の数にもよるが、語彙のスペリング、正確にいうと視覚情報（ビジュアル）と音声結びつくことがねらいである。もちろん意味についても簡単に導入しておきたい。また、後日復習するときも、1度目にしたフラッシュカードの印象は大いに利用できる。

### 3. 本文を使って — 「読む」

「英語を読む」ことはいろいろな意味にとらえられる。読書するような読み方もあれば、教室で音読することも「読むこと」の一つである。いわゆる読解力、評価規準でいえば【理解の能力】の領域で、「英文を読んで、事実関係を正確に読み取ることができる」や「ある分量の英文を読んで、その大意を理解できる」などをねらいとすれば、教科書の本文はそのやり方の一例を学ぶ材料に過ぎない。筆記試験を

やるにしても、同じ本文をそのまま使うことはまずできない。記憶力に左右されやすい内容で“理解の能力”は測れないからだ。この部分でも、教師の努力が必要になる。

「音読練習」は、多かれ少なかれ毎時間必ず授業の中で繰り返されている学習だろう。中学生の英語の基礎学力の一つとして、最もわかりやすいものだ。とにかく本を開いて、読ませてみればわかることだから。僕の場合は“表現の能力”の領域の「内容を伝えることを意識して、教科書の音読ができる」という規準を掲げている。もちろんここでいう「教科書」とは、「本文」のことである。

音読練習では、モデルの提示から個々の生徒の音読まで段階的な指導が重要になる。「全体から個へ」という原則をふまえて、毎時間、練習時間を確保したい。

### 4. 本文で考える

本文には文化の違いや社会的背景や人物を紹介したり、ドキュメンタリーとして問題的をしたりといった、英語学習を立体的に、奥深くしていく使命がある。中学校段階でどこまでが必要かという考え方もあるが、一方入門期だからこそ本物が大切だという考え方もある。教師の関わり方で、ほとんど全てが決まってくる部分だ。平和でも、差別でも、社会問題でも、取り上げすぎれば英語の授業の時間だけでは収まりがつかないことは明白である。では、何もしないでいいのかという悩みは常にある。少なくとも「問題提起」として投げかけておくことはできるはずだ。先にオーラル・イントロダクションは、英語の使った表現方法を具体的に示す絶好のタイミングであると述べた。そこに教科書で使われているのと違う写真が一枚入ったらどうだろうか。生徒がその内容を再現するのに、自分で探してきた写真を一枚入れたらどうだろうか。そのような生徒だったら、いつかその話題に自分の意見を述べる機会があったときにどうするだろうか。そう考えると本文の題材をどのように扱っていくか、そしてどう発展させていくかという楽しい悩みは尽きない。